

《理事長のコーナー&プレゼン最前線 2017年7月号》  
パワーネゴシエーターの要諦（その7）

## 準備 8 割で、全戦全勝した剣豪「宮本武蔵」

皆様は、宮本武蔵の著「五輪の書」をご存知でしょうか。  
今や欧米をはじめ多くの言葉に翻訳され世界中のビジネスマンに読まれるようになりました。海外では、吉川英治氏の小説「宮本武蔵」というより、宮本武蔵自身が書き残した「五輪の書」が高く評価されているのです。  
これはとても重要な事なのです。

確かに、宮本武蔵を有名にしたのは、作家の「吉川英治」氏です。  
大多数の日本人には、吉川英治氏の描いた武蔵像が刷り込まれています。

これは私の勝手な想像の域を出ないのですが、私は全く違う武蔵像をもっています。  
私は両方の本を何度も読んでいますが、その両書には似ても似つかないと申しましょ  
うか、とてつもない乖離がある事に気づきます。

吉川英治氏の描いた武蔵像は、勤勉で不正を嫌い、誠心誠意そして惻隱の心を持った  
たまさに日本武士道の鏡のような武士です。  
一方、晩年のあの鬼のような肖像画と、血の滴るような恐ろしい人殺しの指南書「五  
輪の書」から、私は全くの別人としての「宮本武蔵」をイメージするのです。

私はここでは、吉川英治氏の描いた、前者の武蔵ではなく、どんなに汚い手を使っ  
てでも必ず勝つ！という後者の鬼の手引書に大きな価値を見出し、それを剣ではなく  
交渉術という切り口に重ね合わせてみたいのです。

なぜならば、今やビジネスは国境のないグローバルな戦いになっており、日本人が  
（基本的に素晴らしい品性をもった）日本人を相手に交渉していればよいという時代  
は終わっているのです。誠心誠意だけではやられてしまう現実があるのです。

そうすると、どんな汚い手を使ってくるか分かったものではない、ヒグマやハブの  
様な相手を想定した交渉術を身につけていなければ餌食にされてしまうと言う事です。  
武蔵は60数戦してすべての戦いで勝てたのはなぜでしょうか？

武蔵の剣術の腕が神業だったからでしょうか？  
相手が弱いから、赤子の手を捻るようにして全勝したのでしょうか？

実は、そうとは到底言えないような史実がたくさんあるのです。  
全てぎりぎりの戦いを強いられているのに、全勝しているのです。  
予め決闘の場の茂みに潜んでいて、急に躍り出て、敵対する相手のグループの、頭領を血祭りに上げたりしています。

その相手は10歳位の子供で、しかも頭から腰位まで一刀のもとに唐竹割り（真っ二つ）にし、脱兎の如く、一目散にその場を逃げ去ったりしています。  
誰が見ても卑怯そのもののやり方なのです。

交渉は、真剣勝負と同じで、後には勝ちと負けしか残らないと申し上げました。  
交渉術は、武蔵の戦いと大いに共通するものがあると思うのです。  
武蔵が60数戦して全勝できた理由はただ一つです。  
神が味方したわけではありません。  
武蔵は、徹底的に対戦する相手を研究し、完璧に準備をし、戦いの場と空気までも味方にしてぎりぎりの戦いをかいくぐったのです。

## 「巖流島の決闘」が意味するもの

武蔵の生涯の最終戦は、佐々木小次郎との巖流島での決闘です。  
武蔵も佐々小次郎も藩をバックにした、いわば藩対藩のメンツをかけた戦いになりました。  
私はとても興味がありましたので観光を兼ねて巖流島の決闘の場に行ってみました。

吉川英治氏の「宮本武蔵」から読み取れるのは、あくまでも武蔵の挑発に乗った小次郎が憤慨の窮みに達し、頭はアドネラリンの海で冷静さを失い、へろへろになっている所を權を削って作った、即席の木刀で余裕の元に一撃で倒したとなっているのです。

それは武術に対するズブの素人の考えだと思われてならないのです。  
小次郎をロジックではなく、パッション（感情）でヨレヨレにして、小次郎の刀より一寸長く削った木刀（ロジック）を小次郎の脳天に届かせたと一般には信じられています。天下のNHKが大河ドラマなどで、映像を通してそのように刷り込んでしまっているのです。

そんなことはどうでも良い事ですが・・・

勝利する交渉術は、ロジックとパッション50；50のバランスにあるという本来のテーマに戻りましょう。

## 武蔵の巖流島の決闘



さて、小次郎を感情的に怒らせた戦術は以下の3つとされています。

①わざと2時間も遅れて現場に着いた。(小次郎は、“**武蔵臆したか!**”と憤慨して怒鳴ったと書かれています。)

②真剣ではなく、木刀を使って見くびった。(“この野郎、木刀なんか使って人をバカにしおって!”と思った。)

③小次郎が鞘を波打ち際に捨てるのを見て“小次郎破れたり！勝つ者が何故に鞘を捨てるか！”と叫んだと言われています。

この3通りの挑発ですが、

国内トップクラスの達人だった佐々木小次郎には、何も影響を与えなかったと私は思うのです。正に「カエルの顔に水」なのです。

感情的な揺さぶり戦術とは到底思われない理由として；

①ですが・・・、遅れてきたのではなく、潮の流れが帰りの舟に追い潮になる、つまり潮が変わるタイミングを計っていたのです。(逃げ遅れたら死ぬのです。)⇒ロジックなのです。

②真剣でも木刀でも効果は同じという事は、どんな武芸者には当然分かっていた。木刀の方が、もし延命していたら却って始末が悪いのです。⇒本物の武芸者はかえって恐れる(これもロジック!)

拳銃での戦いなら鉛玉を使われるようなものです。(ダムダム弾)後遺症が超悲惨なのです。

③鞘を腰や背中に戻したら、邪魔で動けたものではない。

(小次郎の刀はとてつもなく長かった、レプリカを見たことがあります。)⇒ロジックそのもの

さて、この決闘の引用で何を申し上げたいかですが、命がけの戦いは、パッション

だけでもロジックだけでもダメだと言う事です。

完璧なまでの両方の使い分けが必要なのです。

実は、この巖流島での戦いは、正に武蔵は事前準備のロジックで勝利していると私は判断します。

その理由をもう少しご説明しましょう。

その決闘は両藩の意地とメンツの戦いだった。

小次郎を担ぐ藩の侍が見届け人として何人もいたのですが、実は彼らが居並ぶ宴幕の後ろや、松林の地面にはたくさんの鉄砲隊と弓隊が伏せて隠れていたのです。

もし、小次郎がやられても、よしんば相討ちであっても二人とも抹殺してしまえ！との裏打ち合わせがあったと思われるのです。

武蔵が勝ったら、藩の名誉は丸つぶれになってしまうのです。

相討ちなら、二人とも闇に葬ってメンツは保たれるのです。それが武士の時代というものなのです。ですから、武蔵は小次郎を打ち殺すや否や舟に飛び乗って、飛び道具の間合い（約30メートル）から逃げねばならなかったのです。

## 武蔵の巖流島の決闘



もちろん、船は直ぐ沖へ逃げられるように浮かべてあった。

陸に乗り上げていたら逃げる余裕を失ったであろう。(分ではなく、秒単位の戦いだったであろうと想定されるのです。Time-base struggle:時間闘争)

そして私は更に想像を膨らませます。

武蔵は小次郎に向って波打ち際を、左方向に走ったに違いないのです。

陸に向って右方向に走ったならば、弓や鉄砲で撃たれていた可能性が十分にあるのです。もしかしたら小次郎もろともに・・・！

なぜならば、飛び道具は（弓も同じ）敵が向かって右に走られると10中8-9当たらないのです。（私は空気銃や鉄砲で小鳥や雉を撃ったことがありますが、動く標的に対しては、左旋回でしか正準は定まりません。）

武蔵は正にロジックで勝利したのであって、パッション（感情）だけの勝利ではなかったのです。もちろん感情的にかく乱させるのは、武蔵の常套手段でした。

**戦略的な交渉も同じだと思ふのです。**

ロジックとパッションを同時に征する者が勝利をするのです。

そしてすべての勝利は、その両観点からの前準備に掛かっているのです。

出たところ勝負は真の勝負とは言えないのです。

おわり

**この続きは8月号に続きます。**